



# 信号機観察記



c/w

丘の上の愚者

詩：煙草、煙、吸い殻

(シングル短編集第二作)

ryoryodrew

## 信号機観察記

---

(※物語の展開上、若干下品な表現が登場します。ご注意ください。)

青、黄色、赤

無常時間が過ぎていく。今僕は信号を観察している。自動車用の横長の奴だ。下に右矢印の信号もある。

それにしても、僕は時々不思議に思う。信号機なんてただの赤青黄色の電灯である。そこに障害物があるわけでもないのに、人々はそれに合わせてきちんと止まる。そうして、秩序だって車は流暢に進んでいる。渋滞や信号無視もあるが、基本的に大半の地域ではしっかりと機能しているのだ。(これは主に日本に限ってのことかもしれないが、)ある時突如決まったルールが今こうして全国で当然のように認識され、そのルールに従っている。

警察があるからだろうか。いや、危ないからかもしれない。何故なら田舎の自動車の通りが少ない比較的安全な交差点では信号無視も多いからだ。とはいえ、そもそも全ての交差点に信号機が備え付けてあるわけではない。そういう場所には大抵信号機はなく、それぞれの判断に任されているものだ。

そんなところで私にふと奇妙な好奇心が湧いた。もし信号機に別の色を加えたら、人はどう解釈して、どう行動するだろうか。

例えば赤と黄色の間にオレンジを入れる。これなら、単純に赤までにもう一段階加わっていると判断し、より慎重に進むまでかもしれない。

では、紫ならどうだろう。当然最初は困惑するだろう。その交差点周辺は混乱し、後ろの方に続く後続車はなかなか進まない渋滞の列に、理由もわからずただひたすらにクラクションを慣らすだろう。それが重なり合って、酷く煩わしい光景がそこに生まれるはずだ。

しかし、それは長くは続かないのではないだろうか。人々はその紫の灯りにいつか意味を見出し、あっという間に世間全般にそれは広がり、とうとうその交差点にも秩序が戻り、普段の光景を取り戻すだろう。

さて、果たしてその新たなルールとはなんだろうか。もうすぐ青になりますよという合図だろうか。信号待ちでよそ見をしていたら、後ろの車にクラクションを鳴らされ、青信号に気づき、慌てて車を発信するというのは、普段車を運転する者なら誰しもが経験したことがあるのではなかろうか。車を運転するにあたって焦りは事故のもとなのである。

そう考えると、よそ見からふと信号をチラ見した時に、信号が紫であれば、よそ見を止めて信号が青になるまで信号を注視することになるのは全くの無駄ではないであろう。とはいえ、国や市町村の大事なお金を費やしてまで作るべきものでもないが。

「こら！ポチ夫！いい加減になさい！」ご主人様のご立腹である。

あ、僕、犬ですよ。賢い犬でしょ？信号観察が好きで、頑固にこの交差点に居座ってたんだけど、

「早く家に帰るよ！」ご主人様のご立腹であるから、そろそろこの交差点を離れないといけな  
いみたいだ。

「きゃ！」

どうしたの？ご主人様！うるうる的な眼差しをご主人様に向ける。けど、これは演技だ。犬  
を飼ってる人は知っとくといひよ。“犬は演技、猫は読モの装い”だ。

それはそうと、ご主人様の目の前には尻がある。生尻だ。僕ならともかく、人間のお尻だ。し  
かも、そこに小魚が突き刺さっている。苦しそうにうごめいている。

大変だ！ご主人様が失神した！

ご主人様の脛を右前足で開くと、目が黄色く滲んでいる。大変だ！黄信号だ！「誰か！誰かご  
主人様を助けて！」　　ワン！ワンワン！ワンワンバウ！

僕の言葉は犬の鳴き声となって空しく響いた。周りの人はほとんどお尻丸出し野郎のせいで遠  
くへ逃げているために、誰もいなかった。車は居ても、窓を閉じていてだれも鳴き声に気付か  
ない。そのお尻某は泣きながら何か悟りを開いた様な顔をしていて、頼りになりそうもなかつた  
。

どうしよう。僕は必死に考えた。くるくるくるくる同じ所廻りながら。

そうして、僕はひらめいた。信号機を使おう！

信号機を上ろうと僕は必死に柱を引っ掻くが、爪が痛んでいくだけだった。

僕の作戦はこうだった。信号機の上からしっぽを垂らし振るのだ。そうすれば、遠くから信号  
機を見ている車が危なく思って慎重に進むようになる。そしてその車に飛び乗る。すると危ない  
からその車は路肩に車を止めて、運転手が降りてくるはずだ。そこでご主人様の所まで行って吠  
え続けるのである。

でも、肝心の信号機に上れなかった。こうなったら、窓を開けている車が赤信号で止まるのを  
待つしか無い。信号機を眺めると、日差しが照りつけ、明るさを増していた。

僕はもう一度ご主人様の脛を開いてみた。オレンジ色になっていた。どうしよう。黄色と赤の

あいだである。つまり、もうじき赤になる。赤信号だ。ご主人様にはもう時間がない！！

その時だった。ご主人様の瞳が赤になったのだ。僕は泣いた。くう～んくう～ん泣いた。僕のせいだ。僕が頑固に信号機を観察していたから……。

それからどれくらいの時間が経っただろうか。彼女の瞳をもう一度覗き込んでみる。どうせもう意味は無い。分かっていた。でも、信じきれずにもう一度覗き込む。

青かった。いや、どちらかというと緑色をしている。まさに青信号の色だった。

「くう～ん？」 どうして……、と鳴いた。すると、車の音がし始めた。交差点の信号機も青になっていた。

「へっ？」 ああ、なんてことだ。ご主人様が目覚めた。ご主人様が目を覚ましたよ。わんわんわんわおーん。僕は飛び跳ねた。そして、叫んだ。人間からすると鳴いているだけかもしれない。でも僕は大喜びだ。しっぽを見てごらんよ。こんなに大きく振っているんだよ！

「私……なんでこんな所に横になって。」 はっ、まずい。ここでまた尻丸出し男に目がいつてしまえば、再び気絶する。しかし、辺りを見渡してもお尻某はもういなくなっていた。これで安心だ。ああ、早く家に帰ろう。

ご主人様の瞳は茶色がかった黒に戻っていた。そこで、僕は気付いた。さっきの瞳の変色は、信号機の灯りを映していたのだと。

僕はこの一件以来、信号機を観察することはしなくなった。それどころか思考をやめたのである。犬は犬らしく、ご主人様を喜ばし、はしゃいでいようと、そう決めたのである。それはあの時みたいに僕のせいでご主人様が大変な目に会う事は避けたいという思いからだった。

と、いうのもあるけれど、生尻がトラウマになっていて、もうああいう予測不可能なアクシデントに会いたく無い、という思いからが主だった。

それにしても、お尻某が何をしたかったのかは未だに謎である。

アビの交差点では、彼はもう一種の都市伝説となっている。

Dogs are partially color-blind. So someone says she is not a dog. But nobody knows the truth. . .

健全な青少年であれば、芸能人に憧れを抱くものだ。サッカー選手、お天気姉さん、作家。彼女らのせいで人々は無謀な夢を追い、目を輝かせてそれに没頭する。しかし、いつしか自分の無力さを知り、結局、普通の主婦やキャリアウーマンに落ち着く。だとしても、その思いだけは心の奥底でいつまでも燃え続ける。憧れとは厄介だ。それは全て、彼女らのせいなのであった。

俺たちの憧れはロックンローラーだ。Deep purpleにLed zeppelin、GUNS N'ROSES。そして、ついに今日その憧れに一步近づけることになった。友達である星林檎、玲野純とバンドを組む事になったのだ。今日はそのバンド結成記念すべき第一回の打ち合わせである。場所は俺の家だ。

「トニオ、バンドを組んでも曲が無きゃ仕方が無い。」

林檎が俺に言った。トニオとは俺、ポル＝マガトニー2世のあだ名である。なんでそんな名前かって？それを説明するには出身国について話さないといけない。

まず、樺太をご存知だろうか。かつてロシアの領地だの日本の領地だの、小さく争っていたが、地図上ではどの国の土地でもないことになっていた地域だ。二十数年前、そこにマガラという国が出来た。数少ない親露の日本人と、同じく数少ない親日のロシア人が団結して樺太に新しく作ったのである。

私はその出身だ。だが、生まれて間もなく親とともに日本に移民してきた。親は父母共にロシア人であり、私は出身こそマガラであるが、国籍はもう日本に変えてある。でも、名前はロシア人の親父の名前を受け継いでいるのだ。だから日本人らしからぬこんな名前になっている。

先ほどの林檎の提案に純が乗った。

「そうだよ、早速俺らだけのオリジナルソングを作っちゃおうぜ！」

俺ら“だけ”という言葉の響きに、期待で胸がいっぱいになる。

「こんなのどうだ？まずはタイトルだ。“Fool on the hill”」

純が続けて言う。いい響きだ。でも、どこかで聞いた事のある響きだった。

「純、ビートルズだな？いいね、それ！応用して、その日本訳の『丘の上の愚者』ってのは

どう？」

なるほど、ビートルズの曲にあったな。でも、それって…

「なあ、それじゃあパクリだよ。」オリジナリティの欠片も無い。

「いいじゃねえか。どうせ世に出る曲じゃねえし。……いいか？俺のモットーは“パクっちまおうぜ”だ。大体、人は何事も真似て学ぶんだ。人間的じゃないか。」

林檎がとんでもないことを言い出した。確か雑誌で似た様な発言をしたグループが数年前にもいた。その発言と実際に楽曲が他のアーティストの曲に似ている物が多い事から、ネット上では荒れに荒れた。しかし、最近になって、ネット上で「あれはやりすぎた。彼らはそんな悪いアーティストでもなかった。」と、反省する声も密かに増えているようだ。でもやっぱり、俺はそんなの許せなかった。

「俺らだけの曲、作るんだろ？少なくとも俺は、そんな借り物の音楽はやりたくないな。」

「トニオは真面目だなあ。」

林檎は適当だなあ。と、俺が返すと、「なんだよ」と、トニオは下唇を出す。

俺はその後もとにかく粘った。お願いだ。パクリだけは寄してくれ。俺が素敵なタイトルを考えるから。そうやって必死に頼み込み、どうにか『丘の上の愚者』案はなくなった。だが、もっと考えてから発言すべきだった。

本当に俺がタイトルを考えることになった。しかも、素敵な。

林檎、純が帰宅して、俺はタイトルに悩まされていた。

前略、中原中也様。あなたならどんな題名を付けるのでしょうか。どうかお教えてください。  
ゆあーん ゆよーん ゆあゆよん。

「雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ……」俺の頭の中の宮沢賢治が詩を朗読し始めたときだった。

故郷であるマガラの言葉が思い出されたのである。「dann-dann-dodenn-deodaen（ダン-ダ

ン-ドデン-デオダエン)」。段違いにラブリーなベイバーという意味だ。

マガラ語は基本的にd+母音に-nn（文末のみ-n）というスペルで単語が形成されている。非常に簡易だが、その分レパートリーも少ない。日本語の「雨」と「飴」のようにアクセントの位置が重要である。

ただ、マガラ語は単純にアクセントの位置で聞き分けるだけではない。その簡易すぎる言語故に、それだけではとてもじゃないが、たくさんの重複したスペルの単語を聞き分ける事はできない。

だから、マガラ語にはメロディーがある。会話が歌であり、その旋律から意味を理解するのが基本なのだ。であるから、文章化する際には必ず譜面ごと載せる事になる。

ド (C) ・ ミ (E) の音での「dann-dann-」を他の単語に付けると副詞的な役割となり、次にくる単語に合わせて「上へ上へ」的なニュアンスになるのだが、「dann-dann-dodenn-deodaen」だと、「dodenn- (愛くるしい)」があとに続く為、「もっともっと愛くるしい」みたいな感じになる。そして、最後の「-daen」は可愛い娘みたいな意味になる。だから意識すると「段違いにラブリーなベイバー」だ。

決めた。初めての俺たちのオリジナルソング。『段違いにラブリーなベイバー』で決まりだ。

なんてロックなタイトルだ。自分のセンスに酔いそうだぜ。

「トニオ、ダサイよ、それ。」再集結後、したり顔で、先ほどのタイトルを叫ぶも、あっけなく、この案は反故になった。一日中考えたのに。

「それより、俺、もっと良いタイトル思いついたよ。」純が言う。

「『ゆあん ゆよん ゆあゆよん』なんてどうだ！」それは中原中也の『サーカス』の一節だった。

「なにそれ！意味不明！いいね！意味ありげで！」林檎は賛成のようだ。が、俺はやっぱり気に食わない。そもそも

「中原中也でしょ？パクリじゃんって。」俺は冷めた目で純を睨む。すると、偉そうに純は死後五十年経ってるから著作権もないし、別にいいじゃんか。と片目の下瞼を指で引っ張り、舌を出す。あっかんべーのポーズだ。



「あっ、あっかんべー……。 」俺は思いついた。俺らの初めてのオリジナルソングのタイトルだ。

「どうした？」林檎と純が不思議そうに俺を見つめてくる。

「タイトルだよ！なんかこう、これこそどんな意味でも付けられそうじゃん！『あっかんべー』」

かくして、俺たちは初オリジナル『あっかんべー』の制作を開始した。

作詞はトライアングル&ボーカルの林檎が、作曲はカスタネット&ボーカルの純が、編曲をギロ&ボーカルの俺が努める事になった。

俺たちはきっと革新的なエンターテイナーとして、雑誌にも載る事になるだろう。初のマガラ出身スター誕生にロッキンオンマガラも放っておきやしないはずだ！

ちなみに、彼らのバンド名はこう決まった。『小高い丘の上の愚か者達』。ちょっと長かった。こんな名前、売れない。でも青春なのだよ。諸君。

『あっかんべー』  
作詞：ジュテーム星 作曲：オムロン玲野 編曲：マガトニー =ポル野

(前奏 1秒)

みんなで みんなで あっかんべー  
おじいちゃんも おばあちゃんも あっかんべー  
あっかんべーしておれば  
きっと平和になるでしょね

ねえ、段違いにラブリーなベイベー  
俺たちの段違いに圧巻なベイベーを  
ブイブイ言わせて下さい女王様

(間奏 5分23秒)

ねえ、段違いにラブリーなベイベー  
俺たちの段違いに圧巻なベイベーを  
ブイブイ言わせて下さい女王様

Hey! 段違いにラブリーなプリンセス  
ゆあん ゆよん ゆあゆよん (x∞)

(dann-dann- フェードアウト)

——初ライブは大不評だったそうなの。めでたし、めでたし。

---

[序文 違和感] [【検索】](#)

もしかして：

[\[序文での違和感は偏見の象徴かもしれない\]](#) ではないですか？

---

## 煙草、煙、吸い殻（詩）

---

時間がない、  
時間がない、  
時間がない。

僕にはもう、時間がないのだ。

二十日鼠の行き交う路地裏で、  
右手の人刺し指と泣かせ指に挟んだ煙草に火を浸ける。  
たつぷりと、たつぷりと。

これでもか、これでもか、と。

吸うのだ。  
そうすると、煙は僕の物になった。  
自由に吐いて、自由に解放した。

そして、すぐさま消えるのだから、滑稽で、虚しくて。  
思わず、空を見上げる。  
摩天楼に挟まれ、僅かにしか姿を見せないけれど、その中で微かに霞む上弦の月。

僕はそいつに同情している。  
今にもそいつは消え失せそうで、物悲しい背中を見せている。

時間がない、  
時間がない、  
時間がない。

本当はあるのではないかと、薄ら笑いが聞こえる。

人は思い込むと、真実になるのだ、と、語る煙草の煙。  
お前に言われたく無いよ。  
そう、僕は、思った、強く、思った。

思い込んだら最後、それは現実となるのでは。

思い込んだら最後、それは現実となるのでは。

「思い込んだら最後、それが現実となるのですか。」

煩い煙草だ。

消してしまえ。

灰皿を認識して、右手人差し指と泣かせ指に挟まれた煙草を、  
注射するが如く親指で灰皿に押し付ける。

残ったのは、虚しさだけだったのでは。

残ったのは、虚しさだけだったのでは。

「残ったのは、虚しさだけだったのですよ。」

さよなら煙草の吸い殻。

ポイツと放って、

ついでに罪悪の感情も、全てそいつに背負わせて。

捨てたのだ。

## 信号機観察記

<http://p.booklog.jp/book/58671>

著者 : ryoryodrew

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ryoryodrew/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58671>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58671>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ